

平成13年度 国立大学・学部附属学校等教官 海外派遣に参加して

今岡正治

1. はじめに

平成13年10月31日から11月24日の25日間、全国の附属校の先生方とともに平成13年度国立大学・学部附属学校等教官海外派遣のA団として教育文化施設等の視察研修に参加させていただいた。この長期に渡る研修では、諸外国の先生や児童生徒たちと直接に触れあう中で、実に多くのことを学び、体感しながら、諸外国の教育事情を知ると同時に、日本の教育事情のあり様を振り返る絶好の機会となった。ここに、研修で得た概要を報告するとともに、私の随想や感想も併せて研修を振り返ってみたい。しかしその前に、今回の研修に参加するにあたり、快く出させていただいた教職員の方々、私の留守中にたくさんの行事を大成功に終えた生徒のみなさん、生徒を後ろから支えていただいた保護者のみなさまに、まずもって感謝いたします。

2. 研修日程と内容

事前に与えられた予定では、後半にはニューヨークでの研修が計画されていたが9月11日、米国での同時多発テロの影響で、旅程が直前に変更になり、サンフランシスコでの研修となった。それに伴い、後半でのスケジュールでニューヨークがとりやめられ、ミュンヘン、サンフランシスコが加わった。以下は、旅行の日程とあわせ、事前研修時や夜間の自由な時間に行った私の自主研修の概要である。

研修のために滞在した国と都市は以下の通りである。

デンマーク	コペンハーゲン	オルフス
ドイツ	ハイデルベルグ	アウグスブルグ ミュンヘン
アメリカ 合衆国	アナポリス	ワシントン サンフランシスコ

期日	滞在地	研修内容等	期日	滞在地	研修内容等
1 10月31日(木)	成田発 コペンハーゲン	成田～フランクフルト (LH711: B747-400) フランクフルト～コペンハーゲン (LH3026: A321)	10 11月9日(金)	ハイデルベルグ	午前 ゴミ処理、環境教育(市庁舎) 午後 環境遊歩道(ケーニヒスツール) 夜間 マンハイム歌劇場「こうもり」
2 11月1日(木)	コペンハーゲン	午前 フリースクール視察 (BORDINGS FRISKOLE) 午後 フリースクール視察 (FREDERIK SFRISKOLE) 夜間 ロイヤルオペラ「カルメン」	11 11月10日(土)	ハイデルベルグ	個人研修 午前 教会オルガンの視察 午後 ハイデルベルグ城等 夜間 マンハイム歌劇場「ラ・ボエーム」
3 11月2日(金)	コペンハーゲン	終日個人研修 午前 歌劇場の視察 午後 市内視察および事前研修 夜間 ロイヤルオペラ「ドンジョバンニ」	12 11月11日(日)	ハイデルベルグ発 ローテンブルグ アウグスブルグ着	午前 バスで移動～ローテンブルグへ 午後 ローテンブルグ市内視察～バスでアウグスブルグ
4 11月3日(土)	コペンハーゲン発 オルフス	午前 バスにて移動 午後 オーデンセ市内視察 夜間 第1回団内懇談会	13 11月12日(月)	アウグスブルグ	午前 ギムナジウム視察 (PEUTINGER) 午後 シュタイナー学校訪問 (FREIE WALDORESCHLE)
5 11月4日(日)	オルフス	午前 戦史博物館 (Forhistorisk Museum) 視察 午後 事前研修 夜間 オルフス歌劇場「リゴレット」 (ATRANTIC USA OPERA)	14 11月13日(火)	アウグスブルグ	午前 基礎学校視察 (VOLKSSCHULE GOEGGINGER) 午後 アウグスブルグ市教育青年局訪問
6 11月5日(月)	オルフス	午前 教育委員会 (ARHUS CityHall) 訪問 ギムナジウム視察 (LANGKER GYMNASIUM) 午後 成人教育機関視察 (VUC ARHUS)	15 11月14日(水)	アウグスブルグ	午前 職業教育学校視察 (BERUFS SCHULE) 午後 生涯学習施設視察 (VOLKSHOCH SCHULE) 夜間 答礼懇談会
7 11月6日(火)	オルフス	午前 障害児学校視察 (STENSAGER SKOLE) 午後 ナーシングセンター (KOLTGARDEN)	16 11月15日(木)	アウグスブルグ発 ミュンヘン着	午前 バスにてミュンヘンに移動 午後 ミュンヘン市内文化施設見学 (博物館, 美術館等) 夜間 プラハ放送交響楽団演奏会 「運命」他 (ガスタイク)
8 11月7日(水)	オルフス	午前 国民学校 (SKOVVANG SKOLEN) アフタースクール (SKOVVANG) 夜間 答礼懇談会	17 11月16日(金)	ミュンヘン	終日 ノイシュバンシュタイン城見学 夜間 バイエルン州立オペラ「清教徒」
9 11月8日(木)	オルフス発 ハイデルベルグ	午前 列車でコペンハーゲンへ移動 午後 コペンハーゲン～フランクフルト (SK633: MD81) ～バスで移動～ハイデルベルグ	18 11月17日(土)	ミュンヘン発 アナポリス着	終日移動 ミュンヘン～フランクフルト (LH119: A300-600) フランクフルト～ワシントン DC (LH418: B747-400) グラス空港～アナポリス (バス)

期 日	滞 在 地	研 修 内 容 等	期 日	滞 在 地	研 修 内 容 等		
20	11月19日(月)	アナポリス	高等学校視察 (KENT ISLAND HIGH SCHOOL) 中学校視察 (STEVENSVILLE MIDDLE Sch.) 小学校視察 (BAY SIDE ELEMENTARY Sch.) 午後 答礼懇談昼食会	23	11月22日(木)	サンフランシスコ	サンフランシスコ市内視察 (金門橋, Fisherman's Wharf, Twin Peaks 等) 午後 研修資料等の整理
21	11月20日(火)	アナポリス	午前 メリーランド州教育局訪問 午後 国立水族館視察 (National Aquarium)	24	11月23日	サンフランシスコ	終日移動 バスでサンフランシスコ空港へ (NH007: B777-200) ～成田空港
22	11月21日(水)	アナポリス発 サンフランシスコ	終日移動 アナポリス～グラス空港 (バス) ワシントン DC～サンフランシスコ (UA181: B767-200)	25	24日 (金・土)	発 東京 (成田) 着	

3. デンマークについて

ドイツのフランクフルトを經由して、まず北欧の入り口、アンデルセンの国デンマークに到着した。北欧やイギリスもそうだが、この地域から北部の冬の気候は、寒さが厳しく一日中低い雲に覆われ、日照時間が極端に減る。11月はじめ、いよいよ長く、暗い冬の到来を思わせる天候である。

(1) 生活から

まず、気が付いたことは夜間、家庭の照明が異様に暗いということである。夕刻、外から家々の窓明かりを見ても、ほんのりとしており、変な言い方かもしれないが外の闇といい感じでマッチしている。これは、学校でも同じことで、会議室や教室の照明が思いのほか暗いのである。私たちが訪れた施設や学校では、天井に蛍光灯はあるにしても、それらは使用せず、自然光や壁の間接照明やテーブルのろうそくのみで仕事や学習を進めていた。保健環境部の私としては大変驚いたが、この暗さ(明るさ)はしっかりと基準を満たしているのだそうだ。瞳の瞳孔が大きく、光に過敏なデンマークの人たちにとってはいっこうに不自由を感じないのである。

(2) 自転車

最初の滞在都市、コペンハーゲンでまず注意されたのは、車から降りる際、右側から来る自転車に気をつけねばならないということであった。デンマークの都市の多くでは歩道と車道の間に、一間ほどの幅の自転車専用道がある。ここは専用道であるから、歩行者が歩いたり、立ち話をしたりしてはいけないのだが、バスに乗るときなど、つい左から結構なスピードで走ってくる自転車に、ベルを鳴らされてしまう。

特に、ここコペンハーゲンは丘陵地が少なく、坂道が少ないため市民の多くが自転車を利用している。人口の2倍の数の自転車があるといわれている。

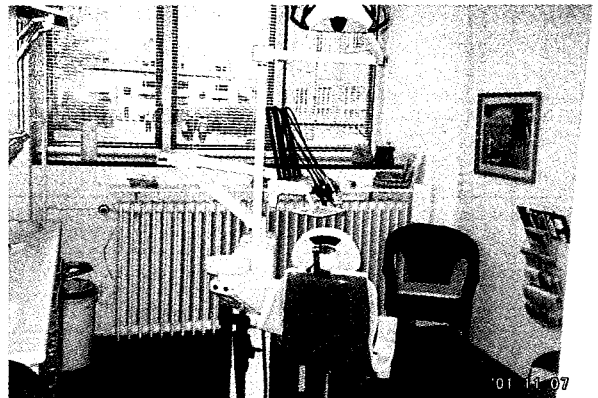
(3) 全学校常設の歯科治療医

デンマークでは8つの学校を訪問したが、初等教育や障害児教育の学校には必ず、歯を治療する治療室がある。日本の学校にある保健室に併設するように歯の



コペンハーゲンのホテル前、歩道と車道の間に自転車専用道がある。車は日中でもライトを点けて走る。

治療台を備えた部屋がいくつかある。もちろん歯科医師も常駐している。これは、小さい頃に早期に虫歯などを発見し治療しておき、大人になってからの歯を健康に保とうという政策だそうである。この施策はもう80年以上続いており、案内役の地元の先生方に聞いても、ご本人はもちろん、周りの誰も虫歯を持っていないと言っておられたのには驚いた。



国民学校の歯科治療室



Bornings Friskole での集会 賛美歌を歌い校長先生の話
を聞く。



授業風景 Bornings Friskole

(4) 学校をまわってみて

デンマークでは8校を視察した。教育事情の詳しい様子は、派遣団の全員で作上げた報告書に詳しいので、ここでは具体的に細かくは触れないでおく。また、訪問した学校のそれぞれ校種が違ったり、経営方針や規模も違うのでまとめてしまうのは乱暴かと思われる。そこで、共通する事柄や発見を記述したい。

まず、学校の運営には各学校やその地区の実状や願いが強く反映され、それに添った計画を地区の代表、生徒の代表、教員の代表、そしてオブザーバーとして学校長で編成される学校理事会が立案し、教育委員会へ提出し承認を得る。「国は外枠だけを作り、枠内は各学校に任せる」といったスタンスが大きく反映されている。例えば、初等教育学校 BORDINGS FRISKOLE では200年に渡る自由主義の発想のもと、個人の自由な感受性を大切にしながら、民主的な考えと個性、社会性を身につけることに重きを置いている。どの学校も1学級20名以下の定員で、TTも多く取り入れ1つの学級を数名の担任で受け持っている。また、学校施設の優劣はあっても「集団の中の個」「学校はひとつの家族」という意識も強いようで、学校によっては、校長の家を校舎の最上階に置き、校長の家族は皆、そこで暮らしているという学校もあった。

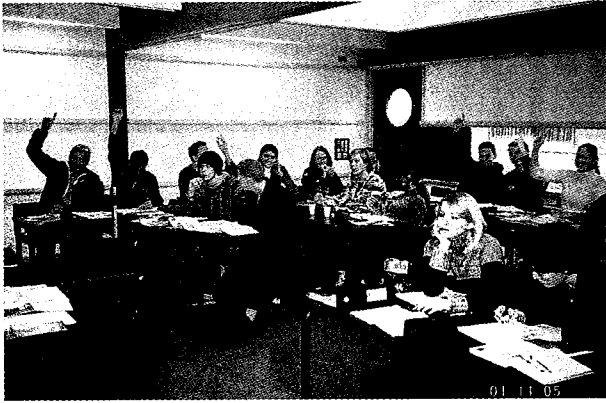
さて、教室を覗いてみると、そこには万国共通のすばらしい子供たちの笑顔があふれていた。児童生徒たちは屈託なく、明るい笑顔で接してくれるが、ジムナジウムになるとさすがに自信に満ち、しっかりとした考えを自分のことばで話す生徒が多くなる。気の付いたことを簡条書きにしてみると、

①先生も生徒も全くの私服である。ネクタイをしている人はほとんど見ない。学校について説明していただいた校長や副校長も全てジーンズにシャツ姿であった。



休憩時間に遊ぶ子供たち Bornings Friskole

- ②初等教育の学校の教室には、ランチ用の冷蔵庫がある。朝、持ってきたランチ（オープンサンドが多い）をそこに入れ、お昼に食べるのである。
- ③日本の情報が結構入っている。ゲームボーイやプレイステは結構持っているようだ。そして、小さな子供たちにはポケモンが大流行であった。一緒に研修したメンバーの中にポケモンカードを持参した先生がいた。その先生は児童生徒に大人気であった。
- ④教え方も授業の受け方も自由である。先生がジーンズで教えるなら、生徒の机の上も自由で、ドリンクを飲みながら授業を受ける。先生は机に座って教えたりもする。授業間の小休憩時にも生徒は自由にスナックなどをほおぼる。「まじめ」に関しての我々の常識とは随分かけ離れた感じである。しかし、授業の集中力や発言の多さには驚かされる。このことについては、もう少し詳しく後述したい。
- ⑤生徒の机や椅子、教室内の備品などが機能的で美しく、教室の壁の色などもとてもセンスにあふれている。机の配置も全員が一斉に前向きではなくコの字やロの字の変形が多い。OHPを使うこと



ギムナジウムでのスペイン語の授業 挙手は人差し指を上立てる。



コペンハーゲンの中心にあるロイヤルオペラハウス

が多いが、教室の360度を使って授業をしているようである。

- ⑥ドイツでもそうだが、児童や生徒はお昼を食べたら学校は終わりである。それぞれ自分のやりたいことをしに、バラバラに動く。自宅に戻ることは少ない。その背景には、デンマークの家庭の95%以上が夫婦とも働いているということがあげられる。両親の仕事が終わる夕方までは、子供たちは家に戻らないのである。そこで多くの子供たちは、午後からはスポーツや音楽、美術やコンピュータなど自分の興味や伸ばしたい能力を養える社会教育施設へ出かける。もちろん、教科の勉強をしたり、アルバイトをしたりする子供も多いという。従って学校には、午後からは生徒の姿を見ない。教員は2時か3時頃には勤務が終わる。残るのは学校を掃除にきた清掃業者の人と学校管理の人くらいである。もちろん生徒や教員は学校を掃除しない。ドイツでもデンマークでも「掃除の時間」は存在しないのであった。

(5) オペラ鑑賞雑記

デンマークはイギリスと同様、王室を国のシンボルとする国である。従って国立の施設にはロイヤルを冠するものが多い。コペンハーゲンでのオペラ公演もデンマークの国立オペラハウス「ロイヤルオペラ」の公演であった。(この場合「王立」と訳す方が正しいかもしれない)

ドンジョヴァンニもカルメンも一言で言えば大変モダンで斬新な演出での上演だった。もっとも、ここコペンハーゲンは、クラシック界でも前衛的な音楽や現代音楽に対して理解が深く、国を挙げて積極的に支援している実状がある。古典的な音楽を現代にアレンジして、広く聴衆にその可否を問っているような所が感じられる。2公演ともにシンプルなステージで釣りも

が多く使われている。衣装も現代風であったが、セットとの兼ね合いは違和感を感じなかった。ただ、「カルメン」では、カルメンと喧嘩をした女子工員がその場で看守長に刺されたり、かっこよく登場のはずのドンホセが闘牛競技中に大けがをしたという設定で、病院のベッドに寝たまま担ぎ込まれ、寝たまま「闘牛士の歌」を歌うなど、解釈に苦しむシーンもあった。しかし、コロセウム式のいわゆる伝統的な円形のオペラ劇場であり、深めのオーケストラピットからは豊かな音響が広がり、残響も十分あり響きを楽しめた。



Joel Lauwers 演出「カルメン」パンフレットから

4. ドイツについて

訪問2カ国目はドイツである。アウグスブルグ、ハ



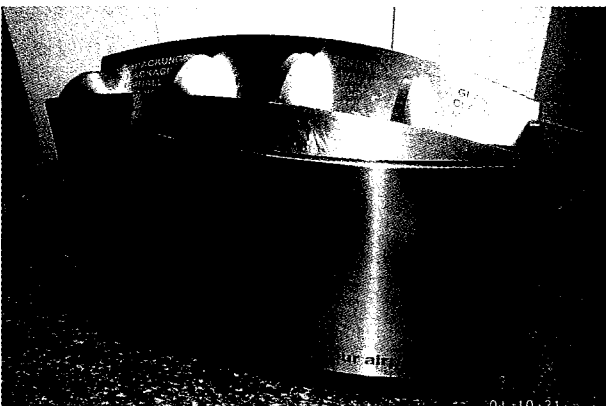
Andreas Homoki 演出「ドンジョヴァンニ」パンフレットから

イデルベルグといったドイツ南部の地方都市での視察となった。この一帯はロマンティック街道とか古城街道とか呼ばれる観光のルート中の都市でもあり、ハイデルベルグは古くからの大学の街、学生の街として栄えた都市でもある。また、美しい町並みや自然環境を保ちながら環境教育や施策において先進的な都市としても全世界に知られており、日本をはじめ世界中から関係者の視察を受けていることでも知られている。そこで、ここでは学校や一般社会における環境教育や施策について述べたい。

まず、私たちはハイデルベルグの市庁舎で廃棄物処理局局長より環境教育やゴミ処理についての概要を聞いた。キーワードは「小さなハンス坊やが学べないことは、大きなハンスおじさんにも学べない」というドイツの古いことわざである。

(1) ゴミの収集について

ドイツ人は法律の好きな国民といわれる。事実、説明にあたったドリフ・フリーベック氏の口からも何度かその言葉がでてきた。ゴミの問題にしても連邦レベルの法律がある。そこでは、大きく「物質を循環させること」が大きなコンセプトとなっている。そこで、



フランクフルト空港のゴミ箱
4つに区別分けされている。

ハイデルベルグ市では次のようにゴミの収集に取り組んでいる。

① ゴミの分別回収

ゴミの種類によってゴミ箱を、茶（生ゴミ） 緑（ガラス） 青（紙） 黄（プラスチック） 灰（危険物）に分別している。これらのゴミ箱はしっかり区別されており、13ヶ国語に翻訳されたパンフレットで全戸に配布されている。ゴミは全て有料で回収され従量制であり、1リットル=11.6ペニヒが基本料金である。一般的な家庭での年間のゴミ処理に必要な経費は220マルク程度だといわれている。市民はゴミ回収チケットを購入して、それをゴミ箱に張って回収する。回収は週に1回行われるがゴミの大きさと量を減らせば料金を節約できる仕組みになっている。また、リサイクル用の大きなゴミ箱が街のいたる所に設置されているが、そこへ市民が自宅のゴミを持参すれば回収料金は無料となる。

また、ドイツでは不燃物というものがなく、全てのゴミは焼却処分かリサイクル化される。灰色のゴミ（その他のゴミ）は隣のマンハイム市にある巨大なゴミ処理施設に運ばれ全て高温で焼却される。大変高温で焼却するためダイオキシン等の発生を防ぎ有毒物質は活性炭等で強力に吸着されるそうである。消却で発生した熱はこの地域一帯の住宅やオフィスなどの空調にあてられる。

(2) 学校教育について

教育委員会に8名の科学者が勤務しており、2名の教育専門家が学校での環境教育にあたっている。実際には次のような取り組みを促進しているという。

- ① ドリンクの容器はパックではなく、リサイクル可能な容器に変更した。
- ② 学校での資材や紙類は常に再生したものを使うこととした。（証書や成績通信票以外は全て再生紙



ハイデルベルグ市内のゴミ回収ボックス

を使用している。これにより学校で使用する紙の94%が再生紙となった)

- ③入学時の文房具購入にはリサイクル品やリサイクル可能な製品を推奨する。そうではないものを使用したり購入する際には、その根拠を説明しなければならない。
- ④学校就学時に全生徒に弁当箱を配布し、自宅から持ち込むランチのラップやパックを少なくする。
- ⑤授業カリキュラムの中に1時間、ゴミの時間があり、行政から専門家が外向いて指導にあたる。
- ⑥市の職員だけでなく、教員たちへの教育や情報の発信を行う。
- ⑦生徒とともにゴミ問題のパンフレットを作り、市の全ての子供たちに配布した。
- ⑧1994年から環境保護教会によるゴミ関連のコンテンツが多く実施されるようになった。例えば「ゴミを捨てるより新しいアイデアを」「ゴミの少ないNO.1はどこ?」「ジュースの空き缶で造形コンテンツ」等。
- ⑨学校での取り組みの中に「子供環境会議」を発足し、その内の「ゴミ探偵団」などは子供たちに関心をおおいに高めた。
- ⑩毎年春には市をあげて大きなキャンペーンを開催して一斉清掃やマスコミや企業を巻き込んだ環境イベントを開催する。
- ⑪省エネやゴミの削減で浮いた費用はそのまま学校で自由に使うことができるようにしている。

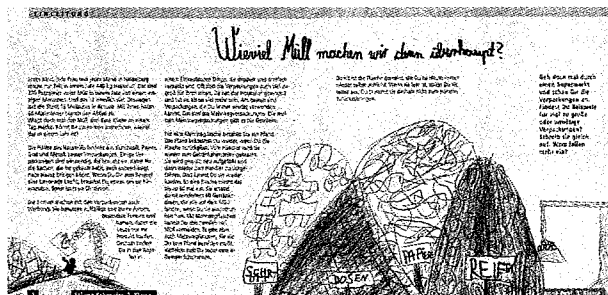
以上のような施策から、これまで一般家庭では年平均700マルクのゴミ処理の費用がかかっていたものが、今では平均200マルク程度となった。学校でも5000～10000マルク程度となり、全体では7～8割のゴミ減を実現しているという。

(3) ギムナジウムにて

バイエルン州では6つの学校や施設を視察したが、ここでは、10才～19才の生徒の通うギムナジウムの主な内容を紹介する。Peutinger Gymnasiumでは、Wolfgang Mutter 校長をはじめ、副校長・進路指導部長・実習部長の各先生方から丁寧な説明を受け、1時間程度の授業参観をさせてもらった。

①州の教育制度について

学校の制度については、国のものはないということだった。従って、バイエルン州の教育制度に則っているが、国内の各州の文部省が連携しているので、全くのバラバラではなく、連邦内においてはある程度共通している部分が多いということである。バイエルン州



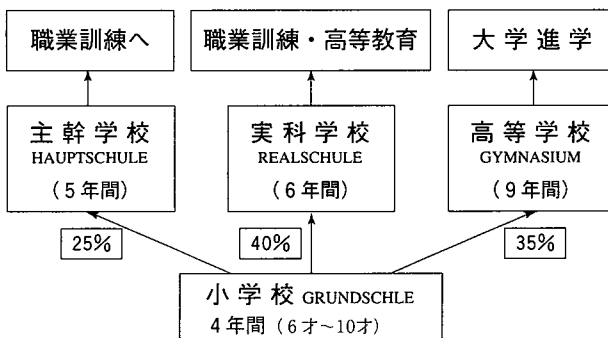
市と子供たちの共同製作のパンフレット



山頂の公園にある空き缶で作ったオブジェ
ハイデルベルグにて

の教育機構の大まかなものは以下の表のようになる。

ギムナジウムへは小学校を終えた児童の35%程度が進学する。学科の勉強や抽象的理論的な学習が好きな



バイエルン州の一般的な学校制度

子供の進む、日本でいえば、いわゆる普通科の中学高校一貫教育の学校にあたる。就学期間は9年間で最低2カ国の外国語を習得し、理数系や文化系に分かれ、最後の2年間では自分の専攻する教科を基本にして、大学受験資格(Abitur)を得る。ギムナジウムに入るためには入試ではなく、小学校卒業時(10才)の段階でいくつかの観点から学校長の推薦が行われる。小学校での学業成績、ドイツ語や数学の点数、学習態度や関心、コミュニケーション力、保護者の希望などが推薦の判断要素だが、10才でその子の将来の進路を決定していく制度には多論があるという。そのため、ギムナジウムへ行きたくても行けなかった生徒に対しては主幹学校や実科学校からの編入の制度もあるということだった。逆にギムナジウムでは、落第3回で他校種へ転校させられる。

実習部長から、バイエルン州で教員になるための制度の説明があった。まず、ギムナジウムを卒業し、大学へ進学し、大学での6~7年間に2~3科目を専攻する。これが終わったら、実習校(セミナー提供校)で2年間の実習を行う。(アウグスブルグには10校ある)この2年間では、最初の半年に1校目、その後は別の学校で1年間、残りの半年は1校目に戻り、その

後に国家試験を受験する。この2年間、ベテラン教師の下で実習が進められる。そのお世話を実習部長がするのだそうだ。現在、このギムナジウムにも28名の実習生がいるそうである。さて、その国家試験だが、3時間分の授業実践と教科指導の論文を評価委員会が審査し、面接と口頭試験が行われる。国家試験に合格したらもう、立派な先生である。ちなみに、授業ではいわゆる教科書は使わない。それぞれの先生が自分の手作りのテキストや教材を使って授業を進めている。また、学校はほぼ午前中授業で、1つの授業は45分である。

その他、印象にあるのは、戦争問題の勉強についてであった。第2次世界大戦の反省や教訓を後生に生かすべく、しっかりとしたカリキュラムが組まれ、10年生(15才)から3ヶ月を集中して戦争問題と大戦について、12、13年生(17、18才)の歴史の時間には半年程度をかけてワイマール時代からナチへの問題などを毎週2時間かけて学習する。戦争当事国としての重大な反省にたった実践であると感じられた。

(4) オペラやコンサートについて

アウグスブルグやハイデルベルグでは教会での小さなコンサートがいくつかあった。日中の自由時間にできる限り教会を見て歩き、中にあるオルガンを訪ねた。何しろドイツの街なので本当にたくさんの教会がそびえ立っている。そんな折り、オルガン奏者が稽古をしたり、夜のコンサートに向けてリハーサルをしたりしているところに出くわすことが多かった。美しい教会の内部に溶け込むように設置されたオルガンからは本当に音が天から降り注ぐように聞こえてくる。残響は長いのだが、音が混ざり合い、聞き苦しくなることはない。実に美しく芯があり、説得力のある音楽が心にしみ入るのが実感できる。時間のたつのも忘れて、ヨーロッパ音楽の源流に接している自分に感動してしまう。



ギムナジウムでの歓迎演奏 バイエルン地方の民謡を演奏した。



音楽の授業風景 講義風にベートーベンについて



ハイデルベルグのリハーサル



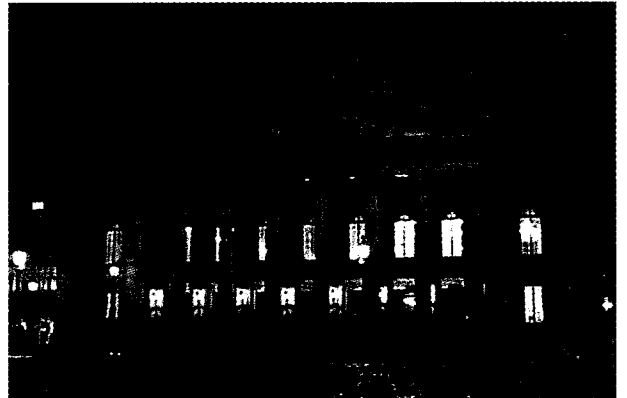
ローテンベルグのかわいいオルガン

そんな素敵な市だが、残念ながらオーケストラのコンサートやオペラには出会えなかった。そこで、アウグスブルグの西隣のマンハイムまで出かけて2つのオペラ公演を鑑賞した。マンハイム歌劇場の「こうもり」と「ラ・ボエーム」である。マンハイム歌劇場は大戦後に建てられた総合センターで、大きな建物の中には演劇や小規模のコンサート用のホールなどが入っており、歌劇場もオペラ専用ではなく、オーケストラコンサートにも使える。客席も一般的なホールの並びで、パイプむき出しの階段など、現代的な建物となっている。観客は2公演とも7、8割の入りであった。気になったのは高齢の方が多いことである。時々若い女性を見ることができたが、若い男性は本当に少ない。若者のクラシック離れが進んでいるのだろうかかと危惧してしまった。

さて、そのステージだが「こうもり」の方はいたって一般的なグランドオペラ風な豪華な舞台と演出で、このオペレッタの醍醐味を十分に味わえた。ただ、オーケストラに精彩を欠く部分も点在したのが残念。第3幕での看守フロッシュ役の俳優（ロルフ・ランスキー）が延々と30分以上一人芝居をし、会場を爆笑の渦に巻き込んだのは圧巻だった。「ラ・ボエーム」の方は演出がRobert Carsenによる斬新なステージとアイデアで楽しめた。傾斜のきついステージで、第1幕では中央にストーブ、そこから天井まで突き抜ける煙突のみというシンプルさだった。キャストの出入りはストーブ横の小迫から行う。純情可憐なミミではなく、はじめからロドルフォをはめてやろうという役づけだった。第2幕への転換は大勢のキャストが一斉にセットや小道具を持って飛び込み、アッという間にカフェモミュスを作る。中には煙突からスルスル降りてくる人もいた。驚かされたのは「ムゼッタのワル

ツ」。例の美しいメロディが流れてきたとたん、ステージ上の大勢のキャストのほとんどがカップルとなり、魔法にかかったように抱擁しあう。ちょっと文章に表しにくい光景が眼前に広がった。こうなるともう、音楽どころの騒ぎではない。

さて、ミュンヘンのバイエルン歌劇場で「清教徒」を見た。研修に出發する直前にミュンヘン滞在が決まったので、事前にどんなコンサートがあるのかわからなかったが、添乗員氏にお願いしてチケットを手に入れることができた。しかし、いい席は取れず、やっと取れた3枚は最上階の棧敷席のそのまた後ろであった。こういう席がオペラ劇場にあるのか、と思ったが、棧敷席で立っている人の後ろに座って、音楽のみを鑑賞する席なのである。そこに座っている人たちは、さも当然といった様子で、パンフレットを見ながら、あるいは目をつむりながらじっと耳を傾けている。(シートには小さな座席灯がついている)しかも会場は超満員で立錐の余地もない。今夜のヒロインはグルベローヴァなのだから無理もない。後でわかったが、大抵半年前の前売りの時点で、チケットはほとん



バイエルン州立歌劇場（ミュンヘン）



マンハイム歌劇場のパンフレットより
あらゆるスタッフが写真入りで紹介されている



「清教徒」の舞台（パンフレットより）

ど売れてしまうのだそうだ。ステージを見るためには最悪の席だったが、その音たるや、これまで聞いてきたオペラハウスが偽物のように思えるほど感想的な響きであった。匂い立つような芳醇なオーケストラの響き、華麗で完璧な歌唱とドラマティックな合唱。まさに、超一流の音楽だった。建築、音響、音楽、舞台演出など、長い歴史と伝統から培われた文化の集積がそこにあるように思われた。そんな舞台を少しでも見ようと私は前に立っている人々の隙間越しに、やっと見える半分のステージを楽しんだ。

最後に、「清教徒」の前日に、ミュンヘンのガスタイクのシンフォニーホールでプラハ放送管弦楽団のコンサートを聴いた。ワインヤード状の客席で大きなホールだが、演奏のほうは余り感心しなかった。何だか演奏者に覇気が感じられない。生き生きとした音楽が伝わりにくかった。

5. アメリカにて

同時多発テロから3ヶ月が過ぎた11月17日に私たちはワシントンのダラス空港に無事到着した。その3日前にニューヨークでの飛行機墜落事故が発生しており、大西洋を渡ることについては、さすがに不安はあったが、予定通り研修を続行せよとの文部科学省からの連絡で、意を決して飛行機に乗ったのだった。予想通り、フランクフルトのセキュリティは厳しく、手荷物検査は3回行われた。そのためどこへ移動するにも長蛇の列で、搭乗口に着く頃にはみんなうんざりしていた。その上、こんな時期だから客が少なくシートにゆったり座れるだろうと思っていたら、意に反して満席。ジャンボの狭いエコノミーシートで、両側を大柄な男性に挟まれ、随分窮屈な思いのフライトとなった。しかし、ダラス空港では、夕刻だったが、外気の暖かさが嬉しかった。これまで、デンマークやドイツでは雨こそ降らなかったが、気温は低く、午前中は氷点下の日が多く、日中でも晴れているのに気温が上がらない日が続いた。ノイシュバンシュタイン城ではマイナス7度だったりした。そんな生活を続けてきたので、ワシントンの暖かさは心も体も和ませてくれた。

アナポリスのホテルへバスで移動途中、ワシントンの市内を通ったが、テロの被害にあったペンタゴンもニュースで見る以上に悲惨な光景に写った。テロの現実が急に身近なものになったような気がした。また、テロの影響で、市内のオフィスビルは深夜でもオフィスの明かりを消すことがなくなったという。

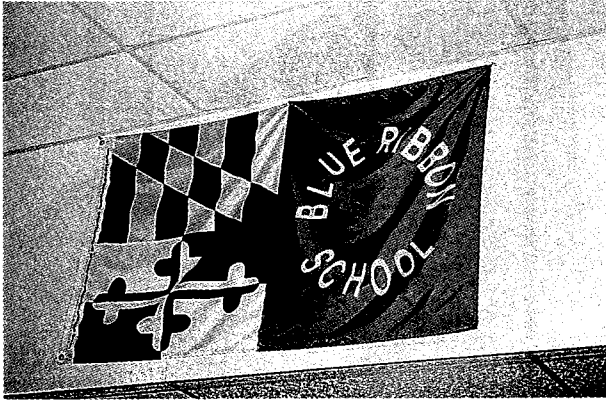


Stevensville Middle School の正面

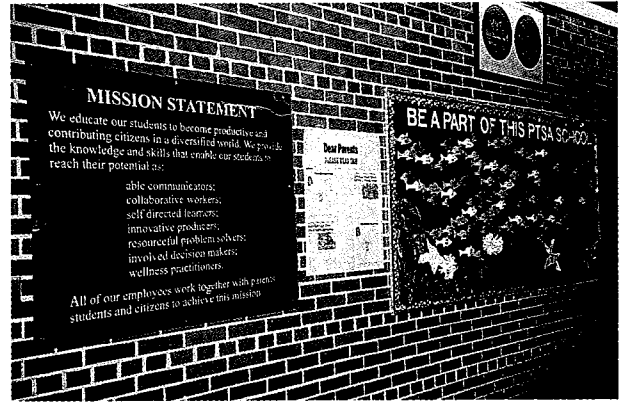
(1) 中学校にて

アメリカでの研修は、間近に迫った「感謝祭」のためスケジュールの調整がうまくいかず、1日に3種の学校を訪れ、その日の午後に答礼昼食会、次の日に教育委員会訪問という変則的なものとなった。その内、メリーランド州のスティーブンスビル中学校 (Stevensville Middle School) での視察について述べたい。茶色のレンガが印象的な校舎で、道路沿いに位置し、フェンスも校門もなく静かで落ち着いた環境の中にその校舎はあった。

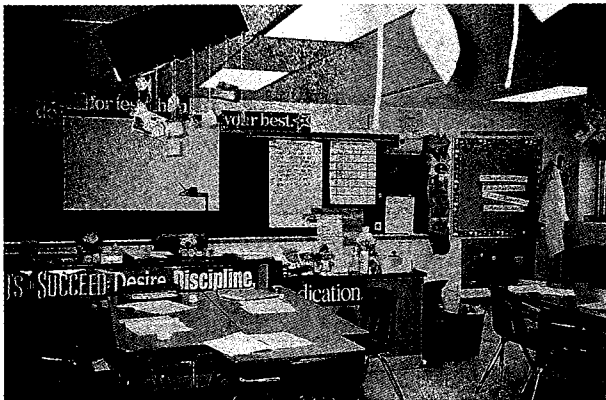
ここでは、6年生から8年生までの660人の生徒が在籍し、子供から大人へと心身共に大きく成長していくこの時期の生徒に対して随所で工夫がなされていた。まず、各学年220人の生徒たちに、国語・数学・科学・社会の4教科を、チームを組んで学習させている。教師も同じように4教科の教師がお互いにチームを組む協力体制をとっている。異なる科目の教師がチームを組むことにより、生徒の指導のあり方に対して、多面的な視点からの打ち合わせや協力が可能になり指導効果が上がるという。また、一日の日課の中で始まりと終わりの2回だけはチャイムをならすが、日中はノーチャイムである。従って、チームを組んでの学習はそれぞれで時間の設定ができ、休憩時間もチーム毎



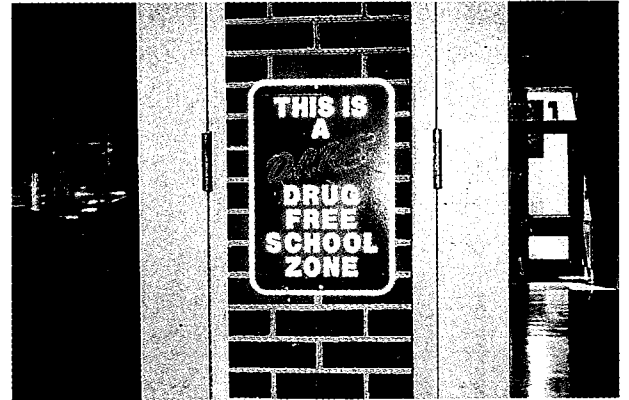
ブルーリボン（優良校）のフラッグ



廊下のポスター PTSA とある



工夫を凝らした教室のデコレーション



昇降口の麻薬追放のポスター

にバラバラになるため、生徒への目も配りやすいということだった。また、前記の必修4教科の他に、芸術（音楽・美術・バンド）、体操、スペイン語、フランス語、コンピュータなどを学習している。また、放課後の課外コースとして、昨年度から国や州の補助を受けて、飛行機づくり・ロケットづくり・ボートづくり・数学の補習などを行っている。また、夏休みなどでは25日間程度の国語・数学の補習やリレーションなどを実施するという。中でも8年生のバンドメンバーはハイスクールの生徒と一緒に活動し、マーチングの盛んなアメリカらしく、校外に出て盛んに演奏活動をしている。

授業を参観してまわったが、気づいたことをいくつか箇条書きにしてみると

- ①授業中でもアメやガム、ジュースはOK。
- ②教科書は大きく重いものが多いので、クラスに備え付けてある。
- ③1クラス25名程度の生徒で構成する。
- ④イヤリング、腕輪、ピアスも自由。
- ⑤教師は全てセキュリティネームをつけている。
- ⑥教室には大きな星条旗が掲げられている。
- ⑦教科によって様々な授業形態のアレンジをする。

教室の掲示にもチーム担当教師のアイデアがふんだんに生かされている。

- ⑧ブルーリボンスクールという、優秀な学校に送られる旗がある。その旗のある廊下に日本ならPTAにあたる用語がPTSA（SはStudent）とあったのには脱帽である。
- ⑨生徒は全員、個人用の大きめのスチールロッカーを持っており、そこに個人の本や用具をしまう。ロッカーはダイヤル式のキーがしっかりかかっている。

(2) 教育委員会で

メリーランド州ではここ10年教育改革の実施と見直しの時期を迎えているという。例えば、学校運営がきちんと行われず、学校が荒れたり、生徒の成績の向上が見られないときは、教員を解雇したり、民間の教育会社から教師を派遣したりと思いついた方策をしている。また、ボランティアを必修としていて、中学から高校を卒業するまでに全生徒が75時間のサービスが必修となっている（Service Learning）。これは、クラスで事前に学習し、実際に体験を通して何が必要で、どうすればいいのかを学ぶものであり、大学入試の際の評価にも加えられている。

また、アメリカでは州または学区によって、それぞれの教育制度が発達しているが、学校の位置する地域によって学力の差が大きいのが問題だということだった。例えば、裕福な家庭の多い地域の学校では、学校の運営予算が集めやすく、そうでない地区は州からの助成に頼らざるを得ない。低所得者層の多い学校では、やはり学力の低下が大きく、社会的な問題となっている。そのため、前述の教育改革の中で、一斉の授業形態をできるだけ少なくして、少人数のグループでの学習形態を多く取り入れる実践をしているということである。

6. おわりに

ここまで、25日間の研修内容をほんの一部だけ書かせていただいた。報告というよりも、書き進める内に随想や雑感の記述が増えたように思う。やはり、今回この文章を書きながらも、色々なことが思い返され、本当に貴重な25日間であったということが身にしみて思われる。

最後に、たくさんの学校で授業を参観しながら感じたことを書きたい。各国の項で前述しているが、授業中の生徒の様子についてである。以下の記述の一部は、共に研修に参加した弘前大学附属小学校の三上智先生のレポートを参考に書かせていただく。三上先生と同じような思いを抱いた私であったが、「研修報告書」の中では、このことについて更に深く触れておられる。

生徒は、授業中でもコーラを飲んだりする。足を組んで先生の話の聞いたり、発言をしたりする。誰かの発言については、とたんに切り返したり、讃辞を送ったり、冗談を言ったりとまるで休み時間のように賑やかである。日本の教師だと、きっと私語を止めさせ、自分の席にきちんと座るように言い、姿勢を正すように言うだろう。コーラなんかは言語道断である。しかし、その生徒たちが学習に不真面目であるかと言えば決してそうではない。私語に聞こえる会話も、その場で必要な情報の交換だったり、足を組んで生徒も教師が話し始めると耳を澄まし、ノートの記述や挙手も速い。コーラを飲みながら、教師や友達と正面から対話し、自分の意志や考えをはっきりと表明する。つまり、日本で言う「不真面目」ととらえられる態度で「真面目」に主体的に授業に参加しているのである。「真面目」という観念や定義が日本だけのものであり(ちょっと言い過ぎか)万国共通でないことをまざま

ざと感じた。

ここで、日本的な「真面目」をナンセンスというつもりは全くない。日本を「礼を重んずる」という国として、それを美德と感じる外国人もいるし、私自身、「礼」を大切にすることを日本人の誇りとしたいとも思う。しかし、私たち教師が注意しなければいけないのは、いわゆる「真面目な態度」で授業に臨んでいる生徒が、即、「その生徒の主体的な学びが成立している」と同じではないことをはっきりと認識することだと思ふ。不用意な態度面だけの指導や、外面的側面的な評価ではなく、生徒の実質的な主体的な関わりにこそ目をむけねばならないと思うのである。「表面だけにとらわれるな」という当たり前のことだが大切なことを改めて考えさせられた。

25日間もの長期に渡って学校を離れ、諸外国での視察研修は本当にたくさんのことを教えてくれた。様々な人々が自分たちの国や文化を大切にしながら、未来を育む子供たちを懸命に育てようとしている姿をかいま見られたことは、何にもまして貴重な経験であった。その国の教育とは、文化そのものであり、かけがえのない財産であることも実感できた。本年度から、日本でも週5日制の実施。それに伴って学習指導要領も完全実施になった。諸外国の教育事情は、その全てが日本より優れているとは感じなかったが、取り入れたいものはどんどん参考にしたいものである。学校の役割、社会教育の在り方、地域との連携など、大きな枠組みの中で「子供たちを育てる」ことを考えたい。

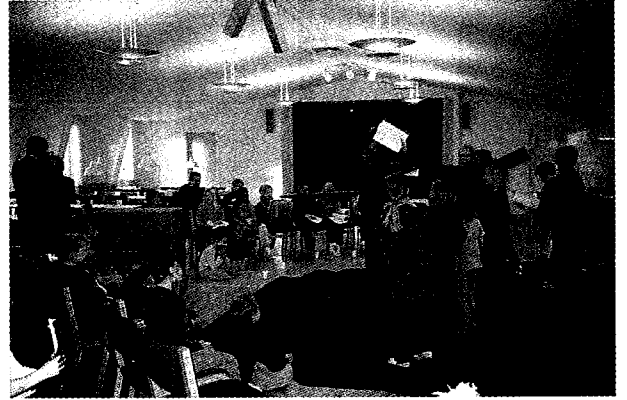
本当に沢山のことを感じ、考えた研修であった。とてもまとまりきらないが、この機会を与えていただいた職場のみなさん、生徒のみなさん、お世話になった多くの方々、そして家族に心からお礼を申し上げます。

島根大学教育学部附属中学校
音楽科 今岡正治
imaokam@edu.shimane-u.ac.jp

巻末に、数枚の写真と、今回の海外研修の報告書に分担執筆した私の原稿や学年通信、松江ロータリークラブの講演に使用した原稿を記載する。



答礼懇談会で日本の歌を紹介（オーフス）



アフタースクールでのミュージカルの練習風景
この時期多くの学校で盛んに行われる。（オーフス）



人魚姫の像 港の入口にひっそりとたたずんでいる。
（コペンハーゲン）



ギムナジウムの生徒たち（オーフス）



アンデルセンの生家（オーデンセにて）



ギムナジウムでの「朝の集い」① 3(4) 参照(オーフス)



ギムナジウムでの集い② 3(4) 参照（オーフス）



大きなランチルームにはカフェバーもある。同ギムナジウム。（オーフス）



国民学校の正面（オーフス）



ギムナジウムの理科室 デザインや配色が美しい（オーフス）



養護学校には本格的な工場があり、専門の作業員が生徒にあった用具を制作する。（オーフス）



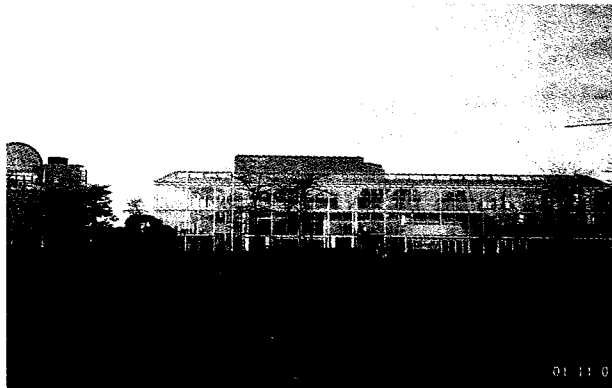
廊下に置かれた電池のリサイクルボックス（アウグスブルグの基礎学校）



答礼懇談会で「茶道」の体験。結構口に合うらしく、おかわりの連発。（オーフス）



算数の授業風景 輝いたまなざしで意欲的に授業に取り組む。発言もとても多い。（同上）



オーフスの音楽ホール 左奥はコンベンションセンター（オーフス）



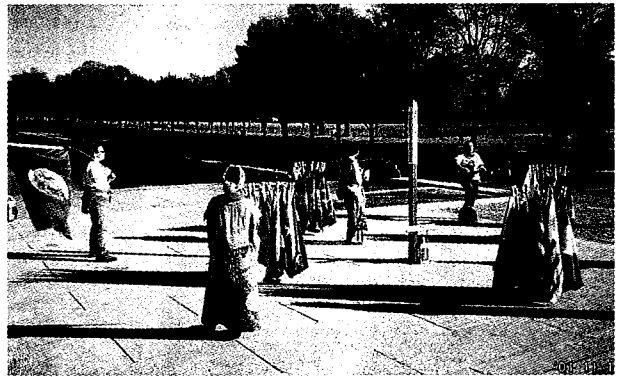
子供たちはカラフルなリュックを使っていた。反射フィルムが貼られ、デザインも様々だ。（同上）



教室にあったゴミ箱 (アウグスブルグの基礎学校)



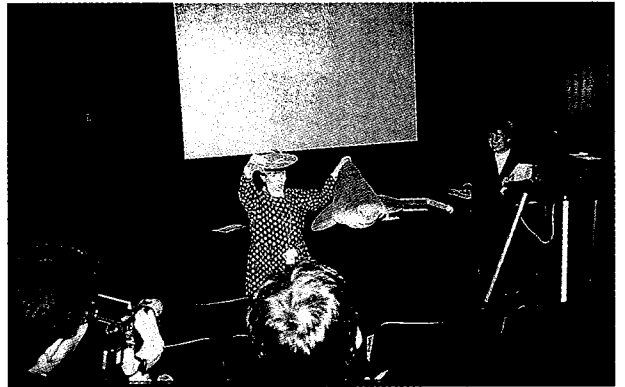
答礼懇談会で基礎学校の校長先生と。(アウグスブルグ)



リンカーンセンターの前広場。市民が平和の歌を歌っている。(ワシントン)



ドイツでもデンマークでも、トイレの落書きは多い。特に、ギムナジウムの生徒は多感のようだ。



ボルチモア水族館では、学校の先生を対象としたセミナーを毎月行っている。(ボルチモア)



Peutinger-Gym では日本の2都市と交流を持ち、交流学習をすすめていた。(アウグスブルグ)



ゴールデンゲートブリッジにて渉外係の集合写真。右端は添乗員の村上氏。左端が筆者。(サンフランシスコ)

学校視察

ギムナジウム（高等普通教育学校）

記録者 今岡正治

1. 訪問日 11月5日（月）

2. 学校の概要

学校名	LANGKAER GYMNASIUM og HF
所在地	Kileparken 25, 8381 Mundelstrup
URL	www.Langkaer.dk
代表者氏名	Anders Ostergaard
教員数	男性35名 女性36名
生徒数	男子280名 女子300名
学年	3
学級数	24クラス

3. 視察内容

オルフスの中心から北西へバスで移動すること15分、学校の建物は美しく閑静な住宅地の中に溶け込むように建てられている。まず、私たちを出迎えてくれたのは長身のアナス・ウスターコ副校長先生。早速、全校生徒がカフェテリアに一同に集まって週2回催される「朝の集会」を見せていただく。この集会は、生徒の実行委員会の主催で火曜と金曜に行われるが、今回は我々が訪問するということもあり月曜日のこの時間となったのだそうだ。わずか20分の休憩の間にステージの準備が進められ出演する生徒が忙しく動き回る中、どこからともなく全校生徒が参集してカフェテリアはたちまち一杯にあふれ、さながらロックコンサートのような熱気を帯びてくる。今日のプログラムは生徒の仲良しサークルのコーラスの発表だったが、ポップス調ゴスペル調の曲を織り交ぜ楽しみながらの演奏に生徒たちも盛んに拍手を送っていた。スクールアドバイザーのケアログ先生の話では、この催しは学校のペースやレベルを一定に保つための大切な意味合いを持ち、知識面だけでなく社会性の伸長を図る重要な活動であるということだった。

続いて、コンピュータールームで学校の概要について説明を受けた。この学校が建てられた25年前は、産業の振興が著しい時期であり、そのため学校の建物もそれを反映して機能性や効率のみを追求した設計になっているが、今日では人間教育の観点からオープンエリ

アやグループ学習、ITの充実などが求められているとのことだった。また、教育の基本方針のキーワードが「橋を作る」ということであるという。これは、フォルケスクール（中等教育）から本校へ、本校から大学への「架け橋」で定期的に互いの教官の交流を行い、かつ、それぞれの節目に4週間を使って生徒は上級学校を訪れ、テーマを持って学習したりするそうである。また、全体の90%の生徒は家庭で自分のコンピュータを持っており、学校での授業と家庭での自学、情報の収集やコントロールを関連づけながら学習を進めることができる。全体の説明を受けた後に、6つのグループに分かれて授業を参観した。私は、スペイン語の授業を見たが、自然の光を間接的に生かした美しい教室で24人の生徒が地図を見ながら、目的地への生き方などをスペイン語で会話していた。

最後に、図書室でヤコブ君はじめ生徒の代表4人と懇談した。その中では、半年毎に自分の進路について考えるチャンスがあることや、ギムナジウムを終了して12年間の学校生活が終われば、多くの生徒はそのまますぐに大学に進まず、1～2年は旅行をしたり町の外に出て勉強の場を求める、というような話を聞いた。そして、日頃、多くの学生は放課後には勉強やアルバイト、スポーツに精を出すのだそうだ。

(帰国報告書より)

何と云っても

天使のギター屋さん

今岡正治

A団のメンバーには残念ながら音楽教諭は私だけであった。そのため自然とレセプションの音楽担当になってしまった。幸いグループの中に高木先生というギターの名手がいらっしやるので「歌の伴奏はギターでやろう!」。高木先生もギター伴奏を快く承諾していただき、後は楽器の手配となった。ところが、正式なルートでは1カ所3万円くらい必要ということだった。とてもそんな予算は会計さんにはお願いできないので「それなら現地で調達しましょう」とのん気に日本を出発したのでした。「そうだ学校を回るのだから、訪問先の学校でギターを借りよう」と添乗の村上さんと段取りをして始まったオルフスでの学校訪問。そんな心持ちだから授業参観や施設見学の間中、自然に「ギターはないか」とキョロキョロするのでした。そして遂にレセプション当日の午後、アフタースクール

で絶好の品を発見。早速借用の願いを、と話を進めようとしたら、事もあろうに「そこの学校の先生はレセプションに参加されません」ときた。ガーン。まさか、参加されない学校からギターだけお借りすることもできず、すごすごとホテルの戻ったのでした。「よっしゃ！こうなったら自力でギターを手に入れるしかない」と意を決して町に出かけたのです。まず市庁舎前の建物の壁に大きくピアノが描かれた楽器屋さんへ飛び込んでみた。店主に事情を説明すると、「ここにはピアノしかないけど駅の裏手にギター屋があるからそこへ行ってみては」と親切に教えてくださった。夕焼けが美しいオルフスの町を歩き、線路を渡って教えられた店「アコースティック」を訪ねた。店の若い人（彼はギター教室の講師らしい）に事情を話すと、「うちはレンタルはやってないけどボスはいい人だからきっといい話になるよ」と言う。そしてボス登場。祈る気持ちでつたない英語を並べてお願いの嵐。何せ、レンタル料は値切るは、次の朝早く私たちはホテルを出発するので楽器を返しに行けないはと、貸す方にとってはすこぶる条件が悪い。こちらとしてはひたすら I'm sorry の連発である。しかし、ボスは笑顔で「わかった。貸してあげよう」と店に並ぶたかさんのギターの中から1本を差し出してくれた。「明日の午前中にホテルにギターを取りに行くから、一緒にスコッチを1本付けといてくれ。それでオーケーだよ。」何とスコッチ1本がレンタル料！。夢のように飛び上がらんばかりの感動でした。飛び込みの、しかも見ず知らずの日本人を信用して店のギターを快く差し出してくれたボスの好意に感激し、精一杯のお礼を言って意気揚々とホテルへ戻ったのでした。絶体絶命のピンチを救ってくれたピアノ屋さんとギター屋さん。2人のお陰でその夜のレセプションは賑やかに開催することができました。もちろん高木先生のギターも冴え渡ります。かくして、次の日の早朝、ギターとスコッチをフロントに残して、幸福感一杯でオルフスを後にしたのでした。

番外編 私の鑑賞したオペラとコンサート（これも立派な研修です。夜遊びではありません）

「カルメン」 「ドン・ジョヴァンニ」 ロイヤルオペラ（コペンハーゲン）

「リゴレット」 オーフス歌劇場

「こうもり」 「ラ・ボエーム」 マンハイム歌劇場

「清教徒」 バイエルン州立歌劇場（ミュンヘン）

プラハ放送交響楽団演奏会（ミュンヘン）

（帰国報告書より）

私と音楽と

今岡正治

この度は、松江東ロータリークラブの例会にお招きいただき、こんな若輩者の拙い話をお聞きいただき本当にありがとうございました。海外研修から帰国したばかりで、さしたる準備もできないまま皆様の前に立ったため話す内容も十分に伝わらずいぶんお聞き苦しい思いをなされたのではと察しております。

お話しさせていただいた内容の要約を、ということのでこの文章を書いておりますが、当日不十分だった事柄の補足をしながら若干紙面をいただきます。しかし、文才もないのですから、どうなることかと案じますが……。

（中略）

ここまで、これまでの道のりをたどってきましたが、先般10月の末から25日間、文部科学省の海外教育視察のメンバーとして全国の23名の先生方と一緒にデンマーク（コペンハーゲンとオルフス）ドイツ（アウグスブルグやハイデルベルグ）アメリカ（ボルチモアやワシントン DC）へ出かける機会に恵まれました。しかし、この時期は日々の授業をはじめ、研究会や校内音楽会、附中コンサートなど1年中で一番実り多い時期ですから、私としてもそれらを生徒と力を合わせて成功させ感動に浸りたいのです。おまけに米国での連続多発テロで世情が大混乱の時期に海外視察など、と思っておりましたが、国家公務員の宿命とかで参加せざるを得ませんでした。そのときに感じたことから、少しお話しします。

みなさんも写真や映像でご存じと思いますが、ヨーロッパの町並みはどれも大変美しく、町全体が調和しています。一般の住宅でも大きな集合住宅でも、昔からの外観を大切に守りながらたずんでいます。ドイツでは石を切り出したレンガ状のピースで、デンマークではコンクリートレンガで外壁を積み上げます。それに、もともと地震の少ない地域なので長い間建物を残すことができます。そういった建物の外壁は、補修しながら何年も使うことができるわけです。そうしておいて、住人はもっぱら部屋の中身に変化や工夫をしていきます。部屋の壁の塗り替えやカーテン、家具入れ替えはもちろん、ITや情報機器の設置など快適な居住空間にどんどん作りかえます。スペースが足りなくなったら地下室や屋根裏部屋を広げたりします。ですから、何年たっても町の景観はほとんど変化がないわけです。もちろん「古き良きものや自分たちの文化

を大切に守る」という気持ちの表れとは思いますが、もう一つ、これは人事などでもそうなのですが「しっかりとした器を作って、その中に新たな工夫や個性を入れていく」という考え方から「文化や発想の違い」がうかがえて、とても興味深いものでした。

文化を生み出す、残すということは、一概には言えませんが、この建物の例でもひとつのあり方がうかがえます。ここ数年、島根県のミュージカルの制作に関わっていますが、この制作のあり方もヨーロッパの建築物に似ているかもしれません。ミュージカルという外側とは、原作や台本、舞台や照明のプラン、音楽や演出等でしょうが、県ではそれらを日本を代表する方々に委嘱しています。いわば一流の作品の土台を県が県民に提供するわけです。そして、広く県民に出演キャストを公募し、数回のオーディションを経て出演者が決まります。そのキャストを指導し、上演へ持っていくのが私たち地元のスタッフなのです。公演毎に出演キャストはほとんど入れ替わります。地元スタッフも同様に出入りがありますが、取り組む作品は毎年「ビリーブインミー」だったり「あいと地球と競売人」なのです。毎年公演していてもキャストが違ったり上演の方向やスタンスが違ったり、同じ作品でもいろいろと違った光が当たってきます。その都度毎に最高のステージをめざして地元スタッフとキャストが全力を傾けて一流のミュージカル作品に挑むわけです。

私としては、学校の役割ももちろんですが、学校から離れた社会的な活動には、大きな意義があると思います。欧米ではすでに一般的となっているこういった活動の場が今後、日本でも多く取り入れられることを望んでいるものの一人です。教育や学校の現状を語り出すときりがありませんが、学校単位での教育、文化、スポーツ活動には必ず限界がきます。これからは地域社会でそういった場が必要だとつくよ思います。

拙い文をお読みいただきありがとうございました。やはり、文才がないのもばれてしまったようです。最後に、このような機会を与えてくださった皆様に感謝いたしますと同時に貴クラブの益々の発展を祈っております。

(ロータリークラブ講演 寄稿より)

外側をしっかりと作って……

今岡正治

10月の末から25日間、文部科学省の海外教育視察のメンバーとして全国の23名の先生方と一緒にデンマーク（コペンハーゲンとオルフス）ドイツ（アウグスブルグやハイデルベルグ）アメリカ（ボルチモアやワシントンDC）へ出かけてきました。この間の約一ヶ月学校を留守にしまい、たくさんの方にご迷惑をおかけしました。日々の授業をはじめ、研究会や校内音楽会、附中コンサートなど1年中で一番実り多い時期ですから、私としても大変楽しみにしていましたが、生徒の団結と保護者のみなさまのお力で無事に終わられたということで大変感謝しております。本当にありがとうございました。

さて、研修の間の様子やちょっとしたこぼれ話をこの学年通信でご紹介することになりました。今回はその第1弾です。(第1弾はちょっと固めに……)

写真や映像でご存じと思いますが、ヨーロッパの町並みはどれも大変美しく、町全体が調和しています。一般の住宅でも大きな集合住宅でも、昔からの外観を大切に守りながらたたずんでいます。ドイツでは石を切り出したレンガ状のピースで、デンマークではコンクリートレンガで外壁を積み上げます。それに、もともと地震の少ない地域なので長い間建物を残すことができます。そういった建物の外壁は、補修しながら何年も使うことができるわけです。そうしておいて、住人はもっぱら部屋の中身に変化や工夫をしていきます。部屋の壁の塗り替えやカーテン、家具入れ替えはもちろん、ITや情報機器の設置など快適な居住空間にどんどん作りかえます。スペースが足りなくなったら地下室や屋根裏部屋を広げたりします。ですから、何年たっても町の景観はほとんど変化がないわけです。もちろん「古き良きものや自分たちの文化を大切に守る」という気持ちの表れとは思いますが、もう一つ、これは人事などでもそうなのですが「しっかりとした器を作って、その中に新たな工夫や個性を入れていく」という考え方から「文化や発想の違い」がうかがえて、とても興味深いものでした。

……次回に続く……

(中学校学年通信より)